

最終話を迎えたマンガ「みいちゃんと山田さん」に対する意見

2026 年 9 月 9 日

一般社団法人 日本自閉症協会

広報部

1. 意見を表明する理由

このマンガではみいちゃんに障害があるとは明言されていませんが、描き方や作者の発信からは、知的障害や発達障害があると推測することができると考えます。そのため、私たちはこのマンガに関するネット上の様々な意見に関心を持ってきました。そのうえで、

- ・ 障害のある人を守る立場から当協会に意見を求める声が届いていること
- ・ 「みいちゃん」が障害のある子を揶揄する言葉として使われる現実があること

から、私たちも意見を表明することにしました。

2. 現実に行き起きていること

全国手をつなぐ育成会連合会の意見書では、「みいちゃん」という言葉が知的障害や発達特性のある女性を揶揄・侮辱する言葉として使われている事例が複数報告されています。当協会でも、自閉症の兄弟を持つ子が「学校でからかわれる」と心配していると報告がありました。また、マンガを読んだ当事者や家族から不安感・不快感が寄せられています。作者や出版社に差別する意図がなくても、このようなことが生じている現実を無視できません。

3. このマンガに関する問題点

いちばん大きな問題を一言で言えば、本来最も重く扱われるべきだったはずの夜職にまつわる問題や、貧困や障害という現実が存在する困難が、商業的な成功（収益）のための材料として扱われたことだと考えます。

また、不幸なみいちゃんを「さりとしたタッチ」で表現したことが揶揄する言葉に使われることにつながったと考えます。

4. 不幸を“材料”にしてしまった

最終話まで読むとこのマンガ全体は、みいちゃんと山田さんという二人の絆の物語であり、話のほとんどを占めていたみいちゃんの経過の部分は、じつは、山田さんが亡くなったみいちゃんと約束した追悼のマンガ、つまり、劇中劇だったと理解しました。しかし、そうであっても、作品の大半は、徹頭徹尾「みいちゃんに何が起きるか」を描いています。作品の大部分を占める「みいちゃん受難」が評価の対象になるのは、自然な反応だと思います。それらを踏まえ、以下に述べる事実から前述した見解に至りました。

① YouTube チャンネルでの発言

講談社ヤングマガジン編集部の公式 YouTube「ヤンマガ日常 ch」の企画の中で、本作品について触れられており、「みいちゃんが可哀想な目に遭うのを見たい」、「この世界の底を

見てみたい」「人が落ちていく様を見たいと思わせるみいちゃんのキャラ」というテロップが表示されました。(8月1日に非公開化)。

編集部自身がこのマンガを山田さんではなくみいちゃんの経過を論じているという事実こそ、この作品が結局のところ「山田さんによる追悼」としてではなく、「みいちゃんの悲劇」として世に受け取られ、みいちゃんという弱い立場の人物が搾取され転落していく様を娯楽として読まれたことの何よりの証拠ではないでしょうか。

② 「リアルみいちゃん」 アクリルスタンド

出版社は、涙を流し半裸の姿のみいちゃんのアクリルスタンドを「レア景品」として抽選プレゼントにしました。出版社自らが不幸を商業的な価値で見ていると言わざるを得ません。

マンガ家志望の山田さんは、誰も訪れないみいちゃんの墓に毎年お参りします。これは、みいちゃんを救えなかった山田さんを通して、作者の寄り添う気持ちを象徴しているように感じます。にもかかわらず、出版社と作者の姿勢からは、「弱い立場の人の不幸を娯楽化する」ものとして読まれ、障害者やその家族に不快感を与えることになったのではないのでしょうか。

5. ネット配信先行のリスクについて

このマンガはネットでの配信が先行したものでした。そのため従来であれば出版社の蓄積された監修やリスク回避機能が組織的に働いたはずですが、ましてやこの作品は作者のデビュー作だとされていますし、デリケートなテーマを扱っていることから、なおさらです。

出版社はネット配信時代の監修体制を整える必要があるのではないのでしょうか。

6. まとめ

以上から、アニメ化については、年齢制限やだれもが視聴できる地上波でなければ良いとは考えません。このマンガの関係者の文化のもとで、アニメ化されることに強い危惧を抱くものです。

障害のある人を守る当協会の立場から、障害のある人への揶揄や侮蔑、障害のある人のきょうだいや家族に対してからかいといったことが起こらないように、また、貧困や障害という現実に存在する困難に対して商業的な成功（収益）や他人の不幸をおもしろがるための材料ではなく、必要な支援につなげられるように、皆様の一層のご理解をお願いします。